

[原著論文]

パラダイム転換は可能か
— 青少年の意識にみるボランティア観 —

千葉 たか子¹⁾

Possibility of a Paradigm Shift
With Special Reference to Young People's Concepts of Volunteers

Takako Chiba¹⁾

Abstract

This paper discusses the possibility of a paradigm shift in the views of volunteers/voluntary activities with special reference to young people's concepts of volunteers. In my discussion, I argue that upgrading the concept of volunteers/voluntary activities from a free labour force to the dynamic of social change and that civil education is key to achieving this paradigm shift.

The Great Hanshin-Awaji Earthquake, which caused heavy casualties and catastrophic damage to the areas, occurred in 1995 and that year was named 'the First Volunteer Year' in the memory of the volunteers who rushed to the area from all over Japan to take part in rescue operations. Since then, volunteers/voluntary activities have become acknowledged and this has led to enactment of the NPO Act of 1998.

Many researchers discuss definitions of volunteers/voluntary activities, and key terms of their definitions include 'voluntary, without payment and for public interest.' These terms simply emphasise that volunteers/voluntary activities are beautiful because the volunteers commit themselves as individuals contributing to the public good. In the same manner, even junior high and senior high school students merely take volunteers/voluntary activities as just 'something good.' This view leads to the degradation and even abuse of volunteers/voluntary activities.

Some people have been asserting that society has been moving towards a lessening of social cohesion. They insist that something should be done to remedy the current situation and to change for the better. Volunteers/voluntary activities could be one of the alternatives in response to this expectation.

(J.Aomori Univ. Health Welf. 10 (2) : 205 - 216, 2009)

キーワード：ボランティア、ボランティア観、パラダイム転換

Key Words : Volunteer, views of volunteer, paradigm shift

要旨

近年、ボランティア（活動）が盛んになり、日本の社会に根付いてきているのは周知の通りである。しかし、ボランティア（活動）をどのように定義するのか、あるいは現代社会にどのように位置づけるのかという点については、いまだに十分な議論されないままに残されてい

る。「ボランティア」は、通常「見返りを求めず、人のために、自発的に活動する人」とされる。しかし、そのようなボランティア観は、ボランティア（活動）を矮小化するものではないだろうか。

本研究では、これからの社会の担い手となる若い世代、高校生や大学生のボランティア観に基づいて、「見返り

1) 青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科

Department of Social Welfare, Faculty of Health Science, Aomori University of Health Welfare

を求めず、人のために、自発的に活動する人」というボランティア観を「古典的」ボランティア観とし、「新しい世紀の担い手となる市民」という「市民的」ボランティア観への移行、すなわちボランティア観のパラダイム転換の可能性について考察するものである。

若い世代の記述にみる限りでは、依然として「古典的」ボランティア観が強いといえる。ただ、少数ではあるものの、「古典的」ボランティア観を越えて、「新たな何か」を生み出すものとして捉えている者がいることも明らかになった。ボランティア観のパラダイム転換、それにはまだ時間がかかりそうだが、転換は確実に進行しているといえるのではないか。「人間社会回復のため」の市民教育のあり方と市民意識の醸成、そのためのボランティア教育はますます重要と考えられる。

1. はじめに

1995年の阪神淡路大震災を契機に、ボランティア（活動）¹が盛んになり、日本の社会に根付いてきているのは周知の通りである。しかし、ボランティア（活動）をどのように定義するのか、あるいは現代社会にどのように位置づけるのかという点については、いまだに十分な議論がなされないままに残されているのではないだろうか。

ことばの定義あるいは社会的意義付けそして使われ方は、時代背景や社会状況の変化に呼応し変化する。いまや、ボランティアということばに、その語源とされる「志願兵²」という意味をまず想起する人はさすがに少ないだろう。

「ボランティア」は、通常「見返りを求めず、人のために、自発的に活動する人」とされる。しかし、そのようなボランティア観は、現代社会のありように適合するものではなく、またボランティア（活動）を矮小化するものではないだろうか。

世紀が変わり、社会状況も激変している。近代資本主義の「行き過ぎた」進化和発展、そして格差拡大（橋本健二 2009）など社会の不安定要素の増加を指摘し、このままでは破綻しかねないと危惧する社会学者も少なくない。閉塞した近代社会の変革の突破口として、「新しい市民³」や「新しい市民社会」を提唱し、危機的な状況を回避するためには、現在の社会のあり方を変革する必要があると提起する。そこで、重要な鍵となるのがボランティア（活動）である。ボランティア（活動）は「新しい市民社会」を創造する力であり、新しい世紀の「市民活動」である（金子郁容 1992；中村尚司 1994；上野千鶴子 1986；佐藤慶幸 2008）。しかし、ボランティア（活動）に、このような機能を求める機運はあるのだろうか。

文部科学省は2000年から段階的に「総合的な学習の時間（以降、総合学習）」を学校現場に導入してきた⁴。

その学習領域の一つが「福祉」で、その具体化として多くの学校で実施されているのがボランティア（活動）である。したがって、児童・生徒の多くがボランティア活動を「とりあえず」体験しているとみなされる。ただ、そのボランティア学習がどのような理念で実施され、そのボランティア（活動）を通して生徒が何を学ぶのか、その結果どのようなボランティア観が育成されることを目的としているのかなどは、必ずしも明確ではない。ボランティア（活動）が、環境の美化のための園芸活動であったり、高齢者福祉施設へ年に1回の訪問であったとしてもそれなりの意義はあるかもしれない。しかし、ボランティア（活動）は単なる「奉仕活動」を越え、新たな社会・地域社会づくりを担うものとして、さらには「市民教育」に位置づけられることが望ましいのではないだろうか。

本研究では、以上のような状況を背景に、これからの社会の担い手となる若い世代、高校生や大学生のボランティア観に基づいて、「見返りを求めず、人のために、自発的に活動する人」というボランティア観を「古典的」ボランティア観とし、「新しい世紀の担い手となる市民」という「市民的」ボランティア観への移行、すなわちボランティア観のパラダイム転換の可能性について考察するものである。

若い世代の記述にみる限りでは、依然として「古典的」ボランティア観が強いといえる。ただ、少数ではあるものの、「古典的」ボランティア観を越えて、「新たな何か」を生み出すものとして捉えている若い世代がいることも明らかになった。ボランティア観のパラダイム転換、それにはまだ時間がかかりそうだが、転換は確実に進行しているといえるのではないか。「人間社会回復のため」の市民教育のあり方と市民意識の醸成、そのためのボランティア教育はますます重要と考えられる。

2. ボランティア（活動）観の整理

1995年、未曾有の被害をもたらした阪神淡路大震災が起こり、その際、被災地の救援と復興のために全国からボランティアが集まり、その活動が日本におけるボランティア（活動）の高まりの序章となった。「ボランティア」ということばが日本でつかわれたのは、この年が初めてではない。しかし、この年のボランティア（活動）の盛り上がりは、その量と質において、それ以前のものとは全く異なり、ボランティア（活動）が社会に広く認知されていくきっかけとなった。このことをもって、この年を「ボランティア元年」と呼ぶようになる。その後、ボランティア（活動）を支え社会的地位を確立するものとして1998年の特定非営利活動促進法（通常、NPO法案⁵）の立法へとつながっていく。

一方、「ボランティア学」が学問足り得るかと言う議論も含め、ボランティアに関する研究も発展する。内海成治(1999)は、『「ボランティア学」と名づけるにふさわしい学問領域や方法論が確立しているとは言い難い」としつつも、「同時にボランティア活動やボランティア団体の運営等の実践から形成されようとしている」と、ボランティア学が発展途上にあると述べている(p.ii)。ボランティア(活動)に関する研究は、ボランティア(活動)の定義など理念に関する学際的な議論と、ボランティア活動を基にした実践報告という2つの大きな領域に分けることができる。後者の場合、実践報告が中心にあるという性格からかボランティア(活動)の定義には踏み込まず、誰もが知っている「良いこと、良いもの、尊いもの」という暗黙の前提のまま、書き進められていることも多い。ボランティア(活動)が実践の上にある学問である以上、理論よりも実践を重視する立場もあり得る。しかし、個人の「美しい行為」に留めておいて充分かという疑問を抱かざるを得ない。

本章では、ボランティア(活動)を「見返りを求めず、人のために、自発的に活動する」といったいわば「個人発の善意の行為」とする見方を「古典的」ボランティア観とし、これに対して「地域社会づくりを担う市民活動」とする新たな「市民的」ボランティア観を提示したい。ただし、「古典的」とは「古い、有効性・有用性を失った」という意味ではなく、あくまでも「オーソドックス」という意味で使用している。

2-1. 「古典的」ボランティア観

ボランティア(活動)に関する研究書はこの十数年かなりの蓄積がなされてきている。ここでは、数人の研究者の議論を取り上げ、「古典的」ボランティア観について検討する。

まず、入江幸男(1999)のボランティア論をみてみよう。入江は、〈自発性〉・〈無償性〉・〈公益性〉の3つのキーワードをボランティアの条件として不可欠であり、かつ十分条件であるとする。これらの3つの条件を、入江は以下のように説明している。

自発性：自分で状況を認識し、自分で価値判断を行い、自分の責任で行為する。自発性は、自立性や自律性などの概念とも密接に関連している。

無償性：経済的な報酬(金銭、物品、サービスなど)を目的としない。無償性は、キリスト教ボランティアの伝統の中では、「カリタス」(愛徳)と結びついていた。無償性とは、私的な利害を越えて普遍的な立場に立って考え議論し行為することを可能にする、という意味も持ちうる。

公益性：活動が他人や社会の役に立つということ。公益とはかならずしも「不特定多数の利益」を意味しない。

(入江幸男 1999:6)¹⁾

入江は、さらに理想条件として、「創造性、先駆性、発見性、相互性、ネットワーキング、継続性、専門性」をあげている。

吉村恭二(1999)は、「ボランティアの特徴」として、以下の4点を挙げている。

- (1)自発性・主体性=自らの意志、内発的促し。
- (2)社会性・連帯性=その時代の課題をみつめ、他者へかかわり、共感、連帯して生きる。
- (3)先駆性・上昇性=より質の高い生き方を絶えず求める。
- (4)無償性=損か得かの経済原則を越えた非営利性。

(吉村恭二 1999:38)²⁾

吉村が用いている語彙は、入江とは異なっているものの、「自発性・主体性」を入江の〈自発性〉、「社会性・連帯性」を〈公益性〉とみなすことができる。そして、吉村の「先駆性・上昇性」を、入江の理想条件である〈先駆性〉や〈創造性〉にまとめることができれば、吉村と入江のボランティア観は共通する。

ことばは概念を示すものであり、どのことばを選び取るかは重要で、単に語感が似ているというだけの理由でまとめるのは厳密性を欠くと言う批判もあろう。ただボランティアに関する入江と吉村の見解を知るという目的においては、吉村が考えるボランティアの特徴と入江の考えるボランティアの条件を同意のものともみなすことは可能である。

最後に、遠藤克弥(2004)が回顧するかつての日本のボランティア観を挙げよう。遠藤によるとボランティアは奉仕と呼ばれ、「個々人の心の中に発生した奉仕の精神に依存して何らかの活動を行うと解釈されてきた。」すなわち、ボランティア(活動)に強く求められてきたのは、「自発性と公益性、無償性」である(遠藤 2004:130)。

〈自発性〉・〈無償性〉・〈公益性〉の3つのキーワードは、ボランティア(活動)の定義として通常挙げられているものであり、広く受容される定義とみて差し支えないだろう。したがって、これらのキーワードを「古典的」ボランティア観を示すものとする。

2-2. 新たな「市民的」ボランティア(活動)観の構築へ

前述したように、かつて、ボランティア(活動)は〈自

発性)・〈無償性〉・〈公益性〉の3つのキーワードで定義されてきた。しかし、ボランティア(活動)をこれらのキーワードで表現しきれぬのだろうか。

金子郁容(1992)は、ボランティア(活動)を「無償の行為だから尊い、見返りを求めるのは不純だ」とするような議論は、「閉鎖的で、魅力に乏しいボランティア像を描いてしまう」と指摘している(pp.5-6)。では、金子はボランティア(活動)をどのように捉えているのだろうか。

ボランティアとは、切実さをもって問題に関わり、つながりをつけようと自ら動くことによって新しい価値を発見する人である。

(金子郁容 1992:7)³⁾

金子は、その著書の中でこの視点を繰り返し述べている(p.65)。そして、ボランティアは社会の閉塞状況を打破するための一つの「窓」とする(p.70)。近代社会は人間関係を分断する方向で作用してきた。資本主義経済体制という巨大な管理システムの中で人は管理・支配されている。近代以前にみられたような相互依存のありかたは大きく変化した。人と人の関係性が希薄になり、閉塞状況が生じている。このような状況を打破するのがボランティア(活動)であると位置づけている。

中村尚司(1994)のボランティア(活動)観は金子より挑戦的でさえある。

ボランティアとは、決して無報酬で奉仕する人でもなければ、自主的、自発的に働くだけの人でもない。ボランティアとは、同時にいくつも仕事を引き受ける人間である。

(中村尚司 1994:173)⁴⁾

中村の「同時にいくつも仕事」とは「多元・多重の活動」であり、それらは以下の4つと示されている。

- (1)家族のような共同生活者の仕事:配偶者、親子、兄弟姉妹などの同居者が支え合う活動
- (2)地域的なつながりをもつ仕事:地域的な相互扶助への参加、他地域とのネットワーク活動
- (3)協同的な経済活動を担う仕事:会社に代わる経済組織による、生産と流通を担う活動
- (4)文化活動と交流の仕事:ジェンダー、地域、国境、民族、時代などをこえる広範な活動

(中村尚司 1994:173)⁵⁾

人は、本来様々な「場」で生活するものである。しかし、近代資本主義は労働を分断し(分業化)、人々を単一の生活の「場」に押し込める(生活の場の分業化)ように進んできた。すなわち、女性は家庭に専業主婦として、男性は会社の企業戦士として、子どもたちもまた「より優れた教育の場に席を得るための」受験戦士として、家庭生活から切り離されていった。中村は、生活の主体者(当事者)である人々(民衆)が、自己の課題を解決しようと学ぶ「もう一つの」社会科学としての「民際学」を発展させた。それは、近代資本主義が破壊した地域社会の再構築であり、人と人をつなぐ新たな関係性づくりの学問である。「民際学」が最終的な課題とするのは、人間の社会的な関係のあり方だということ。このような状況を視野に入れるならば、ボランティア活動も単に「個人発の美しい行為」に閉じこめるのではなく、その活動が社会的にどのような意義があるのか、社会の中にどのように位置づけられるのかという視点で捉えられるべきであろう。すなわちこれがボランティア観のパラダイム転換である。

先にあげた吉村恭二も、その著書でボランティア(活動)を「自己実現を目指して社会的にかかわり働く」ものとし、「それは人間性回復を求めるきざしを唆する」と述べている。ここにも、近代化によって崩壊した人間社会の再構築を担うのがボランティア(活動)とする視点がある。ただ、吉村のボランティア観は前述したように「古典的」ボランティア観から飛躍するものではない。

そこには「もう一つの近代化」を期待させるものがある。それは、政府が主導し、行政がすべてを管轄し、企業が中心となって担う、いわゆる産業主義、管理主義の形で推し進められてきた社会の近代化とは異なるタイプのものである。市民の主体的な参加による、市民倫理感覚にもとづく、豊かな市民社会の発展の可能性である。

(吉村恭二 1999:68)⁶⁾

更に、フェミニズム研究の先鋒である上野千鶴子(1986)の主張をみておきたい。上野は、「これからの社会のあり方」として以下のように述べている。

社会学では、人間の生活圏を三つに分かって第一次生活圏(家族および近隣)、第二次生活圏(職場、学校)、第三次生活圏(余暇空間)としている。それぞれの生活圏は物理的な空間によってではなく、そこで結ばれる社会的紐帯(social bond)の型によって区別される。だから三つの生活圏はそれぞれ、住縁(血縁+地縁)社会、社縁社会、知縁社会と呼びかえることができる。

(中略)「家庭一、地域一、職場一」の標語の含意を私流に読み解けば、人間の全体的な生活のためには、住縁社会、社縁社会、知縁社会の「最適混合」が不可欠だということである。

(上野千鶴子 1986:68-70)⁷⁾

すなわち、上野は、人が生活していく際、一つの生活圏に限定されず、いくつもの生活圏に属して参加していくことが重要だとする。この視点は、中村の「多元・多重の活動」にも重なる。上野もまた、現在の社会において、人と人が分断され、この分断された人間社会の「再統合」がこれからの社会を創造することであるとしている。資本主義は本質的に分業を促進する。この分業体制は、効率的に進めることを目的に、人が住む生活圏を分断する方向で機能した。このことが、現在の地域社会の崩壊を促進した事は、否定できない。地域社会が機能していたかつての状況へ戻すことの可能性については、議論する余地がある。ただ、人間が社会的存在である限り、人が人らしく生きるためには、生活の場をより多くもつことの重要性を看過することはできない。

以上述べてきたように、ボランティア(活動)を新しい世紀を展望する「市民社会づくりへの参加」という位置づけへ転換する必要がある。人が人らしく生きていくことのできる新しい社会を作り出す「市民活動」にならなければならない。ここから、「市民的」ボランティア観には、社会の変革を担う、新しい地域社会を築く、そのような役割を担う人々という概念が含まれるべきであろう。したがって、「市民・変革・新たな」を「市民的」ボランティア観を判断するキーワードとして設定できる。

3. ボランティア(活動)観のパラダイム転換はどこまで進んだのか

前章において、ボランティア(活動)を「市民活動」として位置づけようとする視点への転換の必要性を議論した。すなわち、「古典的」ボランティア観から、「市民的」ボランティア観へのパラダイム転換である。

この視点の転換の提唱は決して、目新しいものではない。先に示した研究者の議論がなされてすでに10年以上経過している(2009年時点)。金子郁容がその著書を記したのは1992年、中村尚司が記したのは1994年、上野千鶴子が記したのは1986年である。では、これだけの時間が経過する中、ボランティア(活動)の位置づけはどれだけ変わったのだろうか。

本章では、高校生と大学生のボランティア(活動)観

についての記述を基に、これからの社会を担う若い世代の人々がボランティア(活動)をどのように捉えているか把握し、パラダイム転換がどこまで進んでいるのかあるいは転換する可能性があるのかを検証してみたい。

3-1. 若い世代の記述から

3-1-1. 協力してくれた高校と生徒の概略

本節で扱うのは、2008年度に筆者が訪問した青森県内の2つの高等学校、A高等学校とB高等学校の生徒の記述である。筆者は、「出前講座」や「出張講義」などで高校を訪問する機会がある。講座や講義の題は筆者の専門性もあり、ボランティアに関するものが多い。

A高校は普通高校で、進路指導の一つとして主に東北地方にある大学の教員を招き、2年生全員を対象に模擬講義を行っている。10講座程設定し、生徒はその中から興味・関心をもったものを一つ選択し、受講する。この回、筆者の講座を受講してくれた生徒は29名であった。

B高校も普通高校で、大学の地域貢献の事業として実施している高校生のための研修講座を行っている⁶⁾。設定されている講座はいくつかあり、生徒が興味・関心を持つ講座を選んで受講するという点で、A高校と同様である。この回の受講生は69名であった(表3-1)。

講座が開催されたのは、いずれも2008年度後半である。

表 3-1 調査対象の高等学校の概略

高校名	青森県立 A 高等学校	青森県立 B 高等学校
受講希望者数(名) ^注	29	72
回収された回答(部)	29	69
回収率(%)	100	100

注：出席確認はしなかったため、受講申し込みの数である。
(出所)筆者作成

3-1-2. 協力してくれた大学と学生の概略

協力してくれたもう一つは青森県内のC大学の2008年度の2年生と2009年度の2年生である⁸⁾。この大学では、ほぼ毎年、一回目の講義の際に、「私のボランティア観」について書いてもらう。本研究では、2008年度と2009年度の2年のみの記述を分析の対象とする。その理由は、この年代の学生達は総合学習の時間が全学年に渡って実施された世代だからである⁹⁾。記述に協力してくれたのは、2008年度生が43名、2009年度生が53名である(表3-2)。

表 3-2 調査対象の学生の概略

学生の年度	2008年度生	2009年度生
出席者数(名)	47	55
回答数(名)	43	53
回収率(%)	91.5	96.4

(出所)筆者作成

3-2. 記述依頼の実施状況

3-2-1. 高校生の場合

講義の後に、参加してくれた生徒に A5 サイズの紙片を配布し、「私のボランティア観」を、5 - 10 分程度で書いてもらった。

3-2-2. 大学生の場合

大学生の場合は、講義の時間の終了 10 分程前に、A4 の 3 分の 1 程の出席カードを配付し、その裏に「私のボランティア観」について書いてもらった¹⁰。

3-3. 倫理的配慮

高校生の場合は、記載にあたって、以下のような点を告げている。すなわち、記述した紙片に名前を記載する必要はないこと、自分のボランティア観を書きたくない人は書かない自由があること、記述は後日研究の資料とする可能性があることなどである。書き終わったら、各自、筆者のもとへ持ってくるようにしたので、提出をもって趣旨は理解され同意したものとみなした。

本稿の執筆にあたっては、高校名はアルファベット（A 高校、B 高校）で示し、個人名も特定されるような可能性はない。

大学生の場合も、書きたくない人は書かない自由があること、記述は後日研究の資料とする可能性があることを告げている。大学生の場合、出席カードの裏に記述するので記者を知ることは可能であるが、本稿の記述に当たっては、個人の特定になるような記述は一切排除している。

3-4. 記述の集計

本集計においては、「古典的」ボランティア観と「市民的」ボランティア観を対比させることを目的としているので、「古典的」ボランティア観と「市民的」ボランティア観に分けて集計する。

3-4-1. 「古典的」ボランティア観について

「古典的」ボランティア観を示すキーワードとして〈自発性〉〈無償性〉〈公益性〉という 3 つを指標として用いる。回答は、自由記述であるために、多様に表現されている。そこで、例えば、「自分から積極的に」「自分の意志で」という表現を〈自発性〉と読む。同様に「自分の利益を考えず」や「お金をもらわずに」を〈無償性〉に、「自分のためではなく」や「誰かのために」という表現を〈公益性〉と読んで分類した（表 3-3）。

1) A 高校の場合

A 高校で、本講義を受講したのは 29 名で、全員が回答してくれた。その結果、〈自発性〉を挙げたのが 9 名、〈無償性〉を挙げたのが 18 名、〈公益性〉を挙げたのが 29 名であった。そして、キーワードが多かった順序は、

表 3-3 キーワードの読み替えの記述例一覧（「古典的」ボランティア観）

分類	記述例
自発性	・自分から積極的に ・自ら、動こうとして・・・ ・だれかに指示されるのではなく、自ら考えて活動する ・自分の意志で etc.
無償性	・自分の利益を考えずに ・お金をもらわずに ・見返りを求めないこと ・利益を気にしないで etc.
公益性	・自分のためではなく ・誰かのために ・困っている人のために ・地域やみんなのために etc.

（出所）筆者作成

表 3-4 A 高校のボランティア観 -1

（単位：名、総数 29 名）

キーワード	記述した生徒数
自発性	9
無償性	18
公益性	29
他	0

注：複数のキーワードを記述している場合があるので、合計は総数（29 名）に一致しない。

（出所）筆者作成

表 3-5 A 高校のボランティア観 -2

（単位：名、括弧の中の数字は百分率）

キーワードの数	生徒数
1つ	7 (24.1%)
2つ	17 (58.6%) 内訳： 公益性と無償性：13 自発性と公益性：4 自発性と無償性：0
3つ	5 (17.2%)
他	0 (0%)
計	29 (100%)

（出所）筆者作成

〈公益性〉 > 〈無償性〉 > 〈自発性〉であった。なお、〈自発性〉・〈無償性〉・〈公益性〉以外のキーワードを挙げた生徒はいなかった（表 3-4）。

3 つのキーワードの中のいくつかを記述している回答もあるので、次に入っているキーワードの数に注目して整理した。キーワード 1 つのみ書いた生徒は 7 名、2 つ書いた生徒は 17 名、3 つ書いた生徒が 5 名であった。さらに、キーワードを 2 つ書いた組み合わせをみると、公益性と無償性の組み合わせが 13 名、自発性と公益性の組み合わせが 4 名、自発性と無償性の組み合わせは 0 名で、〈公益性と無償性〉 > 〈自発性と公益性〉 > 〈自発性と無償性〉の順序であった（表 3-5）。

この記述に限ってみると、A 高校の場合、〈公益性〉がボランティア（活動）の重要な要素であると捉えてい

る生徒が多いことがわかる。そして、〈自発性〉・〈無償性〉・〈公益性〉以外のキーワードがあがらなかったことから、A高校の生徒は、「古典的」ボランティア観を抱いている者が多いといえる。

2) B高校の場合

B高校で、「私のボランティア観」を回収できたのは、69名である⁷。〈自発性〉を挙げた生徒が16名、〈無償性〉を挙げた生徒が36名、〈公益性〉を挙げた生徒が67名で、〈公益性〉というキーワードが圧倒的であった。また、キーワードを挙げた生徒の数も、〈公益性〉 > 〈無償性〉 > 〈自発性〉という順序になっており、A高校と同様の結果であった(表3-6)。

キーワードが複数記述されてある回答があるので、A高校同様に、その内訳を詳細にみた。キーワード1つのみ書いた生徒は22名、2つ書いた生徒は38名、3つ書いた生徒が7名であった。3つのキーワードのうち一つも書かなかった生徒が2名いた(これらの生徒については、後述する)。これは、B高校の特徴であった。

2項目書いた生徒の内訳は、〈公益性と無償性〉の組み合わせが29名、〈自発性と公益性〉の組み合わせが9名、〈自発性と無償性〉の組み合わせは0名で、〈公益性と無償性〉 > 〈自発性と公益性〉 > 〈自発性と無償性〉の順序となった(表3-7)。

以上が、2つの高校の生徒たちが記述してくれたボランティア観の集計である。

3) 大学生の場合

大学生の記述の集計では、08年度生も09年度生も、ボランティア観のキーワードとして〈公益性〉を挙げている学生数が最も多い(表3-8)。

さらに、キーワードを挙げた数を見ると、2008年度生の場合、キーワードが1つの学生は13名、2つが24名、3つが7名、なしが1名である。2009年度生の場合、キーワードが1つの学生は12名、2つが31名、3つが9名、なしが2名である(表3-9)。

キーワードが2つ書かれている場合の組み合わせは、2008年度生は「自発性と公益性」が12名、「自発性と無償性」が0名、「公益性と無償性」が11名、〈自発性と公益性〉 > 〈公益性と無償性〉 > 〈自発性と無償性〉の順序であった。2009年度生は「自発性と公益性」が13名、「自発性と無償性」がやはり0名、「公益性と無償性」が17名で、〈公益性と無償性〉 > 〈自発性と公益性〉 > 〈自発性と無償性〉の順序であった。

表3-6 B高校のボランティア観-1
(単位：名、総数69名)

キーワード	記述した生徒数
自発性	16
無償性	36
公益性	67
他	2

注：一人の生徒が、複数のキーワードを記述している場合があるので、合計は総数に一致しない。
(出所) 筆者作成

表3-7 B高校のボランティア観-2
(単位：名、括弧の中の数字は百分率)

記述したキーワードの数	生徒数
1つ	22 (31.9%)
2つ	38 (55.1%) 公益性と無償性：29 自発性と公益性：9 自発性と無償性：0
3つ	7 (10.1%)
他	2 (2.9%)
小計	69 (100%)

(出所) 筆者作成

表3-8 C大学の学生のボランティア観-1
(単位：名)

キーワード	記述した学生数	
	2008年度生	2009年度生
自発性	2	25
無償性	22	27
公益性	37	49
他	1	2

注：複数のキーワードを記述している場合があるので、合計は総数に一致しない。
(出所) 筆者作成

表3-9 C大学の学生のボランティア観-2
(単位：名、括弧の中の数字は百分率)

記述したキーワードの数	2008年度生	2009年度生
1項目	13 (28.9%)	12 (22.6%)
2項目	24 (53.3%) 自発性と公益性：12 自発性と無償性：0 公益性と無償性：11	30 (56.6%) 自発性と公益性：13 自発性と無償性：0 公益性と無償性：17
3項目	7 (15.6%)	9 (17.0%)
3つのキーワードなし	1 (2.2%)	2 (3.8%)
計	45 (100.0%)	53 (100.0%)

(出所) 筆者作成

3-4-2「市民的」ボランティア観の集計

次に、「市民的」ボランティア観に関してだが、これを示すものとして「市民・変革・新たな」という3つのキーワードを指標として検討した(表3-10)。

1) 高校生の場合

これらのキーワードでみると、A高校の記述数は「0(ゼロ)」で、B高校は「1」である。このことから、この2つの高校の生徒にみる限り「市民的」ボランティア観には至っていないと考えられる(表3-11)。

表 3-10 キーワードの読み替えの記述例一覧（「市民的」ボランティア観）

分類	記述例
市民	=単に「市」に住んでいるからではなく、自立的・社会的な存在を想起させる表現
変革	・ 変革 ・ 現状変更 etc.
新たな	・ 新しい ・ これまでとは違って etc.

(出所) 筆者作成

表 3-11 高校生の「市民的」ボランティア観

(単位：名)

	A 高校 (総数 29 名)	B 高校 (総数 69 名)
市民	0	0
変革	0	1
新たな	0	0
計	0	1

(出所) 筆者作成

表 3-12 大学生の「市民的」ボランティア観

(単位：名)

	2008 年度生 (総数 43 名)	2009 年度生 (総数 53 名)
市民	0	3
変革	0	1
新たな	0	0
計	0	4

(出所) 筆者作成

2) 大学生の場合

大学生の場合も、「市民的」ボランティア観を示すキーワードは極めて少数しか見られなかった(表 3-12)。

3-5. 記述の結果と考察

3-5-1. 高校生のボランティア観

A 高校と B 高校の 2 つの高校の 2 年生が書いてくれたボランティア観の集計をもとに考えると、高校生は「自発性・無償性・公益性」の 3 つをボランティア(活動)のキーワードとして捉えていることが検証されたことになる。それは、多くの生徒たちが、ボランティア(活動)をいまだに「古典的」な枠組みで捉えてことを示している。

一方、「市民的」ボランティア観を示すものとして「市民・変革・新たな」という 3 つのキーワードあげたが、これらのキーワードのいずれもの記述はなかった。このことからこの 2 つの高校の生徒にみる限り「市民的」ボランティア観には至っていないと考えられる。

ただ、B 高校の生徒の記述には A 高校にはみられなかった特徴があるのでそれについて検討してみたい。B 高校の生徒の記述には「自発性・無償性・公益性」の 3 つのキーワードの他に、入江が理想条件とする「ネットワーク」や「相互性」など広がりを感じさせる表現がある。例えば、以下のような記述がある。

- ・ 本当に思いやるなら、相手と交流し、・・・(以下、続く)
- ・ 一方的に支援したり、一方的に受け取るのではなく、お互いに得るものがある関係
- ・ 人と人との心の交流をはかること
- ・ 誰かを助けると言うのではなく、一緒に成長していくもの

(B 高校生の記述より)

さらに、前述したように B 高校には、「自発性・無償性・公益性」のいずれのキーワードも挙げなかった生徒が 2 名いる。この 2 名についてみておきたい。この 2 名の回答には、多くの生徒がボランティア観としてあげた「自発性・無償性・公益性」のキーワードが一つもなかった。では、彼らがどのようなボランティア観を書いたのか、ここに全文を紹介したい。

(記述例 1)

その土地へ行って、そこで現地の人と話すだけでもボランティアになりえると思う。自分の知っていることを、お互い通じ合わせれば、今まで知らなかったことを知り、それで成長できる。発展途上から「発展」させられると思う。心を通じ合わせる行動。

(B 高校の高校生)

(記述例 2)

世界中の人々と自分たちがつながっているという考え方だと思う。「自分とは関係ない」ではなく、「相手を助けてあげよう」と思うボランティアは素晴らしいと思う。利益のために働く人が多い今の現状を変えていけるこのボランティアが世界中に広まったら良いと思う。

(B 高校の高校生)

さらにもう 1 件、「相手への支援をする」という記述があるので、「公益性」として分類したものの、あえてここに記載した部分があるので、(記述例 3)として紹介したい。

(記述例 3)

私にとって、ボランティアとは、人と人との心の交流を図ることで、相手への支援をすることができるだけでなく、自分にとっても、知識を深めたり、心の成長を促すことができるものです。国内だけではなく、世界には色々な考えや生活のルールを持った人たちがいます。そんな人たちと。ボランティアという形で、ふれあっ

ていけばいけるだけ、自分が気づいていなかった母国についても知ることができると感じています。

(B 高校の高校生)

上の2名の高校生の記述には、海外、それも途上国が意識されている様子がうかがわれる。(記述例1)には明確に「国内だけではなく・・・」「母国」と書かれているし、(記述例2)にある「現地の人」とは日本人との対照として書かれた言葉と捉えることができる。ボランティア(活動)を国内に限定せず、広く海外も視野に入れて捉えている様子がうかがえる。また、B高校の記述では、「世界」という言葉を書いた生徒8名あり、これはA高校にはない特徴でもあった。

本稿は、高校比較を目的としたものではないので、2つの高校の生徒の記述集計の比較はこの程度にとどめたい。ただ、2つの学校の生徒たちの意識の違いの理由あるいは背景の一つに学校の取り組みの違いがあると推測できることである。それは、生徒がどのようなボランティア観を持つかに、学校の取り組みの姿勢が影響するということである。このことはまた、学校の取り組み次第で、「古典的」ボランティア観のレベルから「市民的」ボランティア観レベルへ移動する可能性であり、市民教育、市民意識の育成につながる可能性を示すものである。

3-5-2. 大学生のボランティア観

以上の結果をみれば、大学生の場合でも、高校生と同様〈公益性〉をキーワードとする者が最多で、依然、「古典的」ボランティア観を示す〈自発性〉〈公益性〉〈無償性〉をキーワードとして捉えている者が多く、「市民的」ボランティア観に至っていないことが明らかになったといえる。

次に記述に着目して、分析してみよう。学生の記述に、〈自発性〉〈無償性〉〈公益性〉のキーワードがある場合、その学生のボランティア観を「古典的」ボランティア観とみなしてきた。しかし、「古典的」ボランティア観を示すキーワードを記載しつつも、同時に社会へのつながりを意識させる表現が散見する。例えば、以下のような記述がある。

- ・活動者自身の意思に基づいて行われる社会貢献活動であると考え
- ・地域社会の発展・向上のためにも重要なことである。
- ・地域を支えるものとして重要なものの一つに挙げられる
- ・ボランティアは、社会において重要な社会資源

の一つだと思う。

(C 大学生の記述より)

ここには、ボランティア(活動)を「社会」との関わり、社会との位置づけで捉えようとする姿勢がある。これは、高校生との違いの一つであった。では、このような違いがみられた背景にはどのようなものなのだろうか。

この記述をした学生たちは1年次地域福祉論を履修している。これまでの社会福祉では、低所得者、児童、障害者、高齢者のように対象となる人々をいわば独立した別個のグループとして扱ってきた感がある。それに対して、近年はそれぞれ別々の行政組織の対象であった人々を総括的にあるいは包括的に捉えようとする動きが変わっている。特に障害者を対象にした領域では、ノーマライゼーションやインクルージョンの理念が取り入れられ、誰もが共存して暮らせる地域社会作りへとパラダイム転換が進んでいる。その際に、ボランティアは、重要なキーパーソンとして位置づけられている。学生達がボランティア(活動)を社会との関わりから捉えている背景にはこの科目を学習した結果が反映されているとも考えられる。

さらに、今回、記述に協力してくれた学生は、1年次に授業の一環としてボランティア活動を体験したり、ボランティア(活動)についても一部学習したりしているため、ボランティア(活動)については、高校生より一層身近なものとして捉えていると考えられる。このことは、記述全般が充実している印象からもいえるだろう。

以上のことより、ボランティア学習を実施しているかどうかは、ボランティア観の形成の一因となっていることがいえる。

4. パラダイム転換の可能性

前章において、高校生と大学生のボランティア(活動)に関する記述をもとに、若い世代のボランティア観を探ってきた。結果としては、若い世代は〈自発性〉〈無償性〉〈公益性〉のキーワードとしてボランティア観を形成していることが明らかになった。この結果は、若い世代においてパラダイム転換が起こっているとはいえない状況であることを示すものである。

では、パラダイム転換は限りなく遠いものなのだろうか。記述には、「市民」としての視点が全くないわけではなく、パラダイム転換の可能性を示すものもあった。では、その可能性はどのように実現されるのか、ここにいくつかの道筋を提示したい。

4-1. ボランティア教育¹¹

学生のボランティア観の結果に示されたように、学生

はボランティア（活動）を体験したり、学習したりする事によりボランティア（活動）を「社会」とのつながりで見られるようになる。ここにボランティア教育の重要性が示されている。

前掲した遠藤克弥（2004）は、現代の青少年が、公共的な活動や地域社会における活動から離れていることを危惧し、そのことはまた問題解決能力の低下そして問題回避傾向の強さにつながったと指摘している。そして、人間関係維持能力や問題解決能力を培うと共に地域社会でのボランティア活動が重要であるとする。

学校教育現場において、ボランティア教育を進める上で直接的な役割を果たすのが「総合学習」であろう。ただ、「総合学習」のどの領域をどのように扱うかは学校側の創意工夫に委ねられている。より効果的な学習にするための企画・展開・実践になるような配慮が求められるだろう。

近年、国際的な学力調査で、日本の高校生の学力が低下している指摘され、この指摘は学校教育の現場に危機感をあおり、学力向上のための授業時間の増加が議論されている。そして、そこで視野に置かれているのが「総合学習」の廃止である。たとえ廃止まではいかないにしても、有名無実なものになりそうな危惧がある。

4.2. 市民教育

「市民的」ボランティア観への移行に肝要なのは何といっても、「市民」意識の涵養であろう。それは「市民教育」によってなされる。

グローバル化によって人・もの・金（もちろん、環境問題も貧困なども同様である）が容易に国境を越えるようになった。EU諸国では、初等教育の段階からすでに「市民教育（シティズンシップ教育）」が導入されている。特に、イギリスではシティズンシップ教育が制度化され、教育の重要な領域とされている。イギリスのシティズンシップ教育の目的は、批判的思考力の育成である。「批判的思考力とは、やみくもに拒否したり非難したりすることではなく、情報を吟味した上で意思決定することである（三宅麻理 2008）」。だが、日本において、「批判」は「非難・攻撃」と受けとめられがちで、「議論」は日本文化に根付いているとは言い難い。また「政治的リテラシー」を育む教育は「偏向や教化」の恐れがあると考えられる者や「市民」ということばに対する反感を持つ者が行政に関わる者にいる状況は変わっていない（佐渡友哲 2008:10）。したがって、「市民教育」が学校現場に導入される可能性は小さいと考えられる。

4.3. 住民主体の参加・参画

では、日本において「市民的」ボランティア（活動）や「市

民教育」が実現する可能性は低いのだろうか。

近年、敢えて「ボランティア（活動）」といわずとも、日本のあちらこちらで、地域社会が抱える問題・難問を解決しようとする人々が現れてきている。例えば、NHKでは、「ご近所の底力」という番組を2003年から継続して放映し、各地で地域問題に取り組む住民たちの努力を紹介してきた。また、志木市も住民の街づくりへの取り組みでは高い評価を受けている。さらに、青森県八戸市においても市民参加の街造りが行われている¹²。

そこでは、人々が行政をも動かし、あるいは行政を巻き込んで地域の問題解決に取り組んでいる。地域住民が、自分たちの生活を自分たちの力で守ろうとする活動、ここに「新しい市民社会」の芽がすでに育っているのを見ることが出来る。そこに地域と人のエンパワーメント¹³がある。

21世紀が変革の世紀と言われ、「何かが変わる」ことが期待されている。それは、この閉塞状況の打開への期待感である。ボランティア（活動）は、新しい市民社会の創造を担うものとしてその存在意義を確立していく必要がある。

5. 結び

ボランティア（活動）は、この10年余りの間に急激に拡大し、「市民権」を得てきた。しかし、それはまだ「個人発の美しい行為」とみなされる段階に留まり、「新しい市民社会」づくりの鍵とする社会的な位置づけには至っていない。

世紀が改まったとき、新たな改革の時代、「市民の世紀」の到来と歓迎された。しかし、若い世代の「市民」意識が十分に育まれていない状況があることも事実である。「社会観」「市民観」を育成する領域の教育が推進されることにより、この状況は変わり、その変化と並行してボランティア観の転換が進むのではないだろうか。

注

- 1 「ボランティア」ということばは、「ボランティアという行為」そのものと「ボランティアを行なう人」の、両方を意味でつかわれる。本稿では、基本的に「ボランティアという行為」を「ボランティア活動」、ボランティア活動を行なう人を「ボランティア」と表記する。状況に応じ「ボランティア（活動）」と表記することもある。
- 2 「ボランティア」の語源はラテン語 [voluntas] の「自由意志」、フランス語「喜びの精神」、英語「自発的に申し出る」で、英語の「志願兵」からきてるとされる。
- 3 「市民」をどのように定義するのか。それは、ボラン

ティア（活動）をどう定義するのかと同様に重要な課題である。ただ、本稿においては紙面の制約もあり、「主体的に地域社会づくりに参画する人」とするだけに留めておきたい。

- 4 「総合学習」は、すべての教育段階での導入を終えた。「総合学習」には、環境、福祉、国際理解、情報の4つの領域があり、どの領域をどのように扱うかは学校側の創意工夫に委ねられている。全ての領域を均一にまんべんなく扱っている学校もあれば、一つの領域に集中して実施している学校もある。ボランティア教育の場合も、すべての学校で実施されているわけではない。また実施している場合も、どのように企画し、展開し、実践しているかは多様である。
- 5 特定非営利活動促進法は、1998年12月1日に施行され、通常NPO（Non Profit Organization）法とされる。
- 6 この研修事業の主催は、青森県総合社会教育センターである。
- 7 受講申し込み数は当初「72名」であったが、出席数を当日確認していない。
- 8 C大学社会福祉学科では、「国際ボランティア論」を2年次科目として設置している。2004年度から2008年度までの社会福祉学科のカリキュラムにおいては「ボランティア」という名前のついた唯一の科目である。社会福祉学科の学生のみならず、C大学に設置されている看護学科・理学療法学科の全学生を対象とした選択科目であるが、過密な時間割のためか、現実には社会福祉学科と看護学科の学生のみが履修可能である。
- 9 浪人してきた学生や編入生の場合は履修していない可能性はないとはいえませんが、本稿においては厳密に捉える必要性はないと考えている。
- 10 出席カードを利用しているために、裏に書かれた記述をエクセルに入力する際には、意識的に表の氏名などの情報を無視するように努めている。また、この聞き取りは4月当初行うもので、すべての学生の氏名と顔は一致していないため、個人特定ができず、学生にとって不利益が生じる事態は起こらないように努めている。
- 11 「ボランティア教育」には、学習者にボランティア活動を実践させるボランティア教育と、学校教育現場に例えば地域の人がボランティアとして入り、学習活動に参加をするという2通りの意味がある。ここでは、前者の意味で使っている。
- 12 「行政主体の住民参加」が真の意味での「住民参加」になっているかどうかは、必ずや検証の必要がある。
- 13 「エンパワーメント」の定義については多くの議論が

あるが、本稿では「社会的に周辺化された人々の内在的な力を引きだし、状況を変えて行く過程」と定義する（千葉 2008）。

（受理日：平成21年12月14日）

引用文献

- 1) 入江幸男：ボランティアの思想 - 市民的公共性の担い手としてのボランティア - 内海成治他編：ボランティア学を学ぶ人のために。世界思想社、6,1999.
- 2) 吉村恭二：ボランティアの世界 私が変わる 社会が変わる。築地書館、38,1999.
- 3) 金子郁容：岩波新書 235 ボランティア もうひとつの情報社会。岩波書店、7,1992.
- 4) 中村尚司：岩波新書 360 人びとのアジア - 国際学の視座から - 岩波書店、137,1994.
- 5) 同上、173,1994.
- 6) 吉村恭二：ボランティアの世界 私が変わる 社会が変わる。築地書館、68,1999.
- 7) 上野千鶴子：女という快樂。勁草書房、68-70,1986.

参考資料

- 入江 幸男：ボランティアの思想 - 市民的公共性の担い手としてのボランティア - 内海成治他編：ボランティア学を学ぶ人のために。世界思想社、4-21,1999.
- 上野千鶴子：女という快樂。勁草書房、1986.
- 遠藤 克弥：ボランティアと教育。遠藤克弥編：現代国際ボランティア教育論。勉誠出版、129-154,2004.
- 内海 成治：まえがき。内海成治他編：ボランティア学を学ぶ人のために。世界思想社、i-v,1999.
- 金子 郁容：岩波新書 235 ボランティア もうひとつの情報社会。岩波書店、1992.
- 佐藤 慶幸：早稲田社会学ブックレット 現代社会学のトピックス 2 人間社会回復のために - 現代市民社会論。学文社、2008.
- 佐渡 友哲：グローバル社会における市民性と開発教育。開発教育協会編：開発教育』。Vol.55。開発教育協会、8-15,2008.
- 佐野 章二：変革期の行政とボランティア。内海成治他編：ボランティア学を学ぶ人のために。世界思想社、58-74,1999.
- 千葉たか子：エンパワーメント指標考察 - ジェンダーと開発の領域において - 青森県立保健大学雑誌第8巻第1号、27-36,2008.
- 中野 敏男：ボランティア動員型市民社会論の陥穽。現代思想、27（5）、青土社、72-93,1999.

- 中村 尚司：岩波新書 360 人びとのアジア - 民際学の視座から - . 岩波書店, 1994.
- 橋本 健二：新しい階級社会 新しい階級闘争「格差」ですまされない現実. 光文社, 2007.
- 三宅 麻理：イギリスにおけるシティズンシップ教育 能動的な市民を育成する I 試み. 開発教育協会編：開発教育, Vol.55, 開発教育協会, 16-31, 2008.
- 吉村 恭二：ボランティアの世界 私が変わる 社会が変わる. 築地書館, 1999.